

竜座長と城塞の強気従者

全
10
話

R18

体
験
版

第1話

後継者争いと、竜の座長

重々しい第一王子派と第二王子派による権力闘争の影が立ち込める、真夏の交易都市ラウデン・王城離宮。

照りつける太陽が石造りの廊下に熱気を溜め込む中、城の従者として働くレッサーパンダ獣人の青年ロキは、ふさふさとした縞模様の尻尾を小さく跳ねさせながら、両手で抱えた豪華な絨毯を広間の陰へ運んでいた。

（……くそっ、王子たちの継承権争いのせいで、俺たち平従者まで連日駆り出されて殺氣立ってる……。早くこの混乱を抜け出さないと……）

ロキは額に浮き出た汗を拭い、首元へ回した手のひらで服の隙間を静かに確かめた。衣服の裏地には、東岸診療所のモル先生から特別に処方してもらった苦い「消し香」の小袋が忍ばせてある。

ロキには、命に関わる重大な秘密があった。男の姿をして生まれながら男性器を持たず、股間に女性器と子宮だけを持って生まれた「胎持ち」の体質であるということだ。

普段なら城の激務と消し香の香りで体臭をごまかし、持ち前の気の強さと要領の良さで従者として立ち回れる。しかし、真夏の猛暑と満月が近づく重圧が重なり、身体の奥底から込み上げる「月の熱」が、衣服の隙間からかすかな蜜の香りを漏らし始めていた。

（まずいな……熱が上がり始めてる。……早く裏抜け道の鍵を使って自分の部屋に引きこもらないと……）

ロキが胸元のポケットに入った真鍮製の「裏抜け道の鍵」を指先で確かめた、その時だった。

城の広間から響く高らかな拍手と歓声。本日、第一王子の歓心を買うために離宮へ招かれた、街道で高名な興行一座——その楽屋口の重い木造扉が開いた。

「――手前どもの準備は整いました。お下がりにください」

座員を去らせ、一人楽屋から姿を現したのは、圧倒的な体躯と漆黒の角を持つドラゴン獣人――旅一座の座長、ヴォルクだった。

二メートルを超える巨大な身体、竜特有の硬質な鱗が覗く胸元、写真のような眼光。数年ぶりに目にするその姿に、ロキは思わず息をのんだ。

（……ヴォルク！？なんであいつが、こんな政争の渦中にある城に……！？）

ヴォルクはロキにとって、旧市街で育った頃の「腐れ縁」の旧知だった。言葉数が極端に少なく、何を考えているか分からない無口な男。

視線が交差した瞬間、ヴォルクの琥珀色の瞳が静かに収縮した。

「……ロキか」

低く、地鳴りのように響く一声。ヴォルクは足音もなく歩み寄り、ロキの肩口へと鼻先をわずかに近づけた。

「……っ！なんだよ、ヴォルク。急に近づくな……っ！」

ロキは強気な眼差しで睨みつけ、後退ろうとした。しかし、真夏の蒸し返す空気の中、二人の距離がゼロになった瞬間——ロキの体温と消し香の油分が熱でかき消され、股間とお尻の付け根（におい袋）から、熟しきった果実のような濃密な発情臭が、ぶわッと楽屋前に広がった。

「……匂いでわかるぞ」

ヴォルクが低く呟いた。

「——ッ！？」

ロキの背筋に冷たい戦慄が走った。隠し続けていた「月の熱」の甘い匂いを、竜獣人の鋭敏な嗅覚に一瞬で見抜かれたのだ。

「……入れ」

ヴォルクはロキの襟首を掴むと、抵抗する隙も与えず楽屋の中へ連れ込み、重い木扉を閉めて真鍮の鍵をガチャリと降ろした。

退路を断たれた密室の中。ロキは背中を壁に打ち付けながらも、持ち前の勝気な瞳でヴォルクを睨み返した。

「……見たな、ヴォルク。そうだよ、俺は『胎持ち』だ！だが城の従者である俺を無闇に手込めにする気なら、タダじゃ済まさないぞ！」

「……誰が手込めにする言った」

ヴォルクは一切の感情を見せず、淡々とロキへ迫る。乱暴に服を引きちぎるような真似はせず、軍用手縄を取り出すと、ロキの手首を速やかに捉えた。

「な、何するんだ……っ！ 放せ！」

「危険だ。熱で暴れるお前を抑える」

ヴォルクはロキの両手を上掲させ、レッサーパンダが威嚇する際にとる「両手を上にピンと挙げるバンザイのポーズ」のまま、柱の金具へ手縄でしっかりと縛り付けた。両手が頭上で固定されたことで、ロキの胸とお腹、さらに下半身が無防備に晒される。

「くそっ……！ 離せ！ 取引きだ、ヴォルク！」

ロキは縛られたまま、強気に噛みついた。

「俺は王子たちの後継者争いに巻き込まれかけてる！ 俺の手元には城の『裏抜け道の通行鍵』がある！ これをお前にやる……！ だから、俺の発情を誰にも言わないで、今すぐ

「解け！」

「……交渉か」

ヴォルクは短く応じると、ロキのズボンの帯を静かに解いた。

「あ……ッ！？」

布地が押し下げられ、暖かな楽屋の熱気に晒されたロキの股間。

そこには男の象徴など欠片もなく、発情の熱で愛液をにじませ、赤く充血してひくひくと震える処女穴が露わになっていた。さらに、お尻の付け根にある小さな「におい袋」ながらも、照れと発情の甘い汁が溢れて内股を濡らしている。

「……条件を飲めば、身体を差し出すと言いたいのか」

ヴォルクは懷から、黒く硬い「竜の角型小栓」を取り出した。

「な、なんだよそれ……っ！ヴォルク、何をする気だ……ッ！？」

「……お前の蜜は、匂いが強すぎる。城内に撒き散らされては困る」

ヴォルクはロキの太ももを太い手で押し開くと、愛液でぐしょぐしょに濡れた処女穴の口へ、竜の角栓の先端をあてがった。

ズチュ……ッ♡

「んぐっ……ッ!?!♡」

「あゝっ、あああッ♡な、なにを入れるんだっ……!! お腹のなかに、固くて冷たいのが入ってくるうッ♡」

指のかわりにねじ込まれる、硬く太い角栓。みちみちと狭い処女穴を押し広げ、ヴォルクは容赦なく最奥まで角栓をズドンッ♡と押し込んだ。

「……栓をした。……愛液は全部ためておけ、あとで検分する」

ヴォルクは無口なまま、角栓の根元を固く押し留めた。

「ひああッ……！♡お、お腹のなかに栓っ……！抜けない……蜜が出せないよお……ッ♡」

「……鍵の取引は保留だ。……今夜はここで大人しくしている」

ヴォルクはロキの通行鍵をポケットへ収めると、角栓を咥え込まされたまま手縄で吊るされたロキを残し、楽屋の奥へと向かった。

（第2話へ続く）

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。